

開局60周年インタビュ

東海テレビ放送 内田優社長

地域の「今」を映し続ける 「ふるさとイチバン」のテレビ局へ



内田 優（うちだ まさる）
1950年11月、愛知県生まれ。73年、早稲田大学第一文学部卒業、中日新聞社入社。94年、同社名古屋本社社会部次長。98年、東海テレビ入社。2003年、同社報道制作局長。09年、同社常務取締役。11年、同社専務取締役。13年6月から現職。

東海テレビ放送（名古屋市中区）が開局60周年を迎えた。放送業界は今、様々な課題を抱え、その将来像を巡って政府レベルでも議論が起きている。放送の自由化、インターネットへの動画配信など、数十年に一度の変革期ともいわれる。そんな中、様々な分野で常に地域をリードしてきた東海テレビ。円熟期に達した「還暦」という節目の年をどう捉えて、どこへ向かうとしているのか。就任六年目を迎えた内田優社長に、同社の取り組み、将来展望などを語ってもらった。

――60周年の節目を迎えた所感を。

内田 私が社長の時に節目の年を迎えたのはたまたまですが、振り返ってみれば、草創期から成長期など、その時々局面を支えてきた諸先輩の力が大きかったことを改めて感じています。

――周年の位置づけは。視聴率でトップを維持するなど「壮年期」の勢いは伝説的でした。

内田 一〇年前の開局五〇周年

の時は確かに勢いがありましたね。名古屋テレビ塔に巨大なマスコットを飾るなど、記念行事も盛り上がりました。しかし、その後、東日本大震災があり、世の中の雰囲気も随分変わり、テレビ番組に対する期待も変化したように感じます。命の大切さと他者への思いやりです。それへの対応が十分ではなかった点は反省材料です。引き続き厳しい状況が続きますが、六〇年は人生でも一区切りの時。

次の一〇年、二〇年に向け何をやっていくか考えることが重要だと思っています。

――キャッチフレーズ、キャラクターを一新しました。

内田 六〇周年を機にスローガンを「ふるさとイチバン 東海テレビ」に決めました。喜びも悲しみも地域の人々と共有したい、このエリアの皆さんの心のふるさとでありたいとの決意を込めました。IT時代にアナログ的表現と想われるかもしれませんが、あえて「ふるさと」にこだわりました。仕事柄よく出張に出かけますが、テレビチャンネルの「1」はどこ

もNHKで、私どものキー局のフジテレビは「8」です。東海地方の皆さんは、チャンネル「1」に特別な感情を抱いていると思いますね。これこそがまさに「ふるさとイチバン」にこだわった理由です。

――マスコットキャラクターの「イチチー」はユニークですね。

内田 社内の若手・中堅の社員で新キャラクターのチームを作り、そこで練り上げた中から選ば

次の10年、20年に向け 何をやっていくか考えることが重要

れました。ほのぼのとしたふるさととの土の香りが漂ってくるようです。これまでのイメージカラーはブルーが中心で、イエローは新鮮に映ります。イチチーのバッジをつけて買い物に行った時など、レジの方に「それは何ですか」「社章ですか」って聞かれます。キャラクターだと説明すると、「可愛いですね」といってもらっています。周りとはことなく私に似て

た。彼の経験と知名度を生かし、親しみを持っていたくのが狙いです。もう一つは高齢化社会が進む中、六十代のキャスターの頑張りが年配の人たちをきつと勇気づけてくれると思っています。

――若い視聴者を増やす方法は。

内田 うちに限らず、若い人の関心をテレビに集めるのは大変重い課題ですね。視聴習慣も時代とともに変わり、特に若い人は録画

で見る傾向が強いです。リアルタイムで見る人と録画で見る人を合計した新しい視聴率調査も始まりました。これがテレビ局の経営にとって追い風になればいいと考えます。そもそもテレビを見ない若者をどうひきつけるかは簡単ではありません。ニュースでいえば、「なぜ」を深く掘り下げて報道していくことで、若い人がじっくり考える機会になればいいですね。

――周年の記念イベントにも力を入れていきますね。

内田 名古屋市美術館で、睡蓮の絵で知られるモネに焦点を当てた「モネ それからの一〇〇年」を四月下旬から七月初旬まで開催しました。モネにとどまらず、彼の影響を受けた作家の作品を同時に展示することで、モネの存在感がいかに大きかったかが分かる内容で、予想を大きく超える一四万九〇〇〇人の方に来場していただきました。

七月二十一日からは、松坂屋美術館で「アートアクアリウム展」名古屋・金魚の雅」が始まりま

した。二〇一三年と一四年にテレビアホールで開催して、合計五七万人に入場していただきました。会場前の歩道に行列ができるほどの人気で正直驚きました。今回は四年ぶりの開催になります。が、会場の広さも二倍になり、内容もバージョンアップしています。京友禅の着物を埋め込んだ水槽や、江戸時代の大奥を背景に映像、音などを駆使した演出に合わせて金魚や錦鯉数千匹が優雅に泳ぎます。金魚で知られる弥富市が近くにあり、なじみも深いこの地で世界に誇る水族館アトが鑑賞できます。九月十六日まで開催していますので、是非たくさんの人に見に来てほしいですね。

——その他にも？

内田 十月末には久屋大通公園で恒例の東海テレビ感謝祭を予定していますので、多くの皆さんに楽しんでいただける催しにしたいですね。

——ところで、政府の放送制度改革の行方が注目されています。

見解を聞かせてください。

内田 内閣府、総務省、経産省

などいろいろなところで議論になっています。直近では政府の規制改革推進会議の第三次答申が出ました。注目されていた放送法第四条撤廃は盛り込まれずひとまずホツとしました。四条の撤廃は一見規制緩和とも取れますが、実は「政治的に公平であること」の条文をなくし、政権寄りの放送がしやすくなる狙いが透けて見えました。また、番組制作と送信部門を



アートアクアリウム展では京友禅の着物を埋め込んだ作品も展示

分けるソフト、ハード分離案や、空いた周波数帯をオークションにかけるといった産業政策面からの提言が目立ち、多くの懸念があります。議論はまだこれからで、しばらくは目が離せないですね。

——制度改革議論に対する地元局としての期待は。

内田 うちは、キー局でもないし、かといって純然たるローカル局でもありません。いわば、名古屋

中ですが、昼ドラ時代から培ってきた人間ドラマをしっかりと描いていきたいと思っています。

——中継を始めスポーツ番組の制作にも力を入れていますね。

内田 そうですね。「名古屋ウイメンズマラソン」やゴルフトーナメントは全国放送しています。特にゴルフの「東海クラシック」は男女共に当社が主催しており全国的にも珍しいと思います。ラグビーワールドカップや東京オリンピック・パラリンピックが来年、再来年と続きます。スポーツで地元選手をフォローしていくことも私たちの大きな役割ですね。

私が新聞社に勤めていた頃の話になりますが、一九九六年のアトランタオリンピックを現地で取材した時の経験です。当時、知名度の低い競技で予選で敗退した選手を紹介するメディアはほとんどありませんでした。そこで地元選手は予選で敗退しても全員取材し紙面で紹介し、大きな反響を呼びました。メダルには遠くても、日本代表です。出場するだけでも大変なことです。地域に生きるメディ

アの使命でしょう。

——大阪北部地震など地震は時と場所を選びません。対策は。

内田 万全とは言うつもりはありません。対策はその都度考えましたし、これからも新しい技術も取り入れながら常に最善の準備をして行かなければなりません。放送は重要なライフラインです。万一、瀬戸の基地局が機能マヒになった時は、本社ビルから直接送信できるようになっています。全域カバーはできませんが、できる限り放送を継続することが重要と考えています。全面停電に対しても数日間自家発電で対応が可能です。今後も着実に対策を重ねていきたいと思っています。

——社長として六年目に入りました。健康管理は。

内田 なかなか運動する機会はありませんが、休日には家の周りを早足でウォーキングしています。一万歩が目標です。なるべく同じルートを歩くようにしてまして、季節ごとに自然や景色が異なり、新しい発見があります。それが楽しみです。

